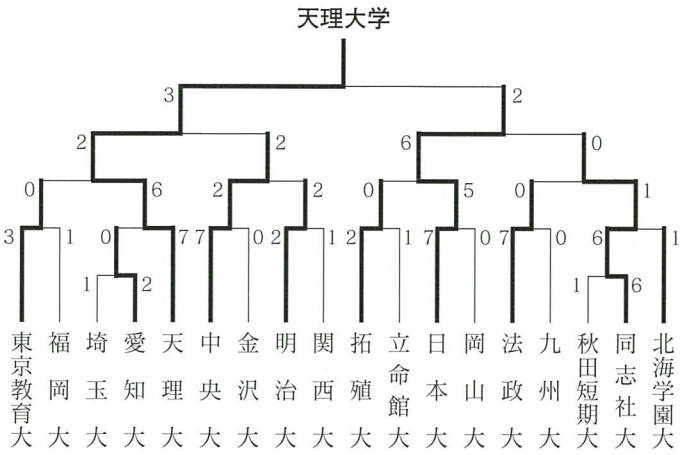
第5回全日本学生柔道優勝大会
7月8日　蔵前国技館



〔決勝戦〕
天理大学　3—2　日本大学

優秀選手　日本大学　松下三郎
天理大学　米田圭介
明治大学　神永昭夫
中央大学　太田伸一
日本大学　加辺良美

第8回全日本学生柔道選手権大会
11月11日　大阪府立体育館

〔準決勝〕
渡辺喜三郎○（中大）　優勢勝　金谷満（日大）
米田圭介○（天理大）　抽選勝　神永昭夫（明大）

〔決勝戦〕
米田圭介○（天理大）　優勢勝　渡辺喜三郎（中大）

第1回全日本招待選抜新人選手権大会
10月21日　福岡スポーツセンター

神永昭夫に栄冠

この大会は所般の事情で二回大会で終わったが二十七歳以下の選抜全日本選手権大会というべき大会で、優勝は明治大学二年生神永昭夫に輝いた。

〔準決勝〕
神永昭夫○（明大）　優勢勝　小田雄三（京都府警）
河野雅英○（大阪府警）　優勢勝　古賀正躯（天理大）

〔決勝戦〕
神永昭夫○（明大）　優勢勝　河野雅英（大阪府警）

決勝は学生柔道界の新人神永と警察柔道界の新人河野との対戦となった。試合は神永の主導で進み、中盤の大内刈が極って「技有」となり勝利を決定づけた。

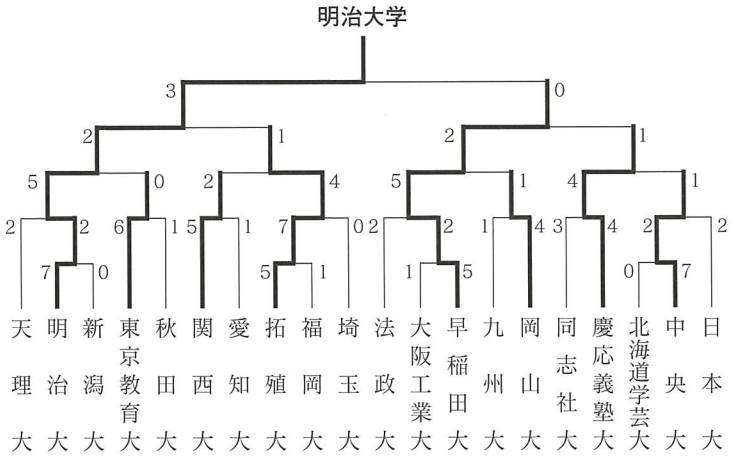
優勝した神永昭夫四段

全日本選手権大会出場者
金子泰興、曽根康治、山肩敏美、石橋弥一郎、中野正登、渡辺政雄

第6回全日本学生柔道優勝大会
7月7日　蔵前国技館

明治優勝旗を奪回

〔準決勝〕



明治大学　2―1　拓殖大学

重松正成○　優勢勝　吉田和男
山口友孝　引　分　永井隆義
黒住大和　引　分　乙女吉年
野田健次郎　大外刈　○山口信三郎
徳山　操　引　分　佐藤和久
神永昭夫　引　分　森島康雄
徳永三幸○　内　股　清水直臣

一対一で大将戦となる。徳永見事な内股で清水を飛ばし主将の責を果した。

早稲田大学　2―1　日本大学

〔決勝戦〕

明治大学　3―0　早稲田大学

重松正成○　大外刈　北井利一
山口友孝　引　分　平本良行
黒住大和○　合せ技　長谷虎雄
野田健次郎　引　分　三宅倫三
徳山　操　引　分　奥村　剛
神永昭夫○　内　股　坂元英郎
徳永三幸　引　分　佐藤経一

明治は先鋒、次鋒と一年生、重松はこの大会尻上がりに調子を出しよく先鋒の大役を果す。黒住は後半に入り体落技有り、続いて内股技有りを決めて勝つ、二回戦で天理大の実力者東元を倒した勢いが続いている。

神永は大事な場面で役割りを果し優勝を決めた。

優勝旗を奪回した明大チーム

優秀選手　明治大学　徳永三幸
　　神永昭夫
　　関西大学　岩田兵衛
　　早稲田大学　三宅倫三
　　拓殖大学　山口信三郎

第9回全日本学生柔道選手権大会
10月10日　大阪府立体育館

〔準決勝〕
松下三郎○　抽選勝　徳山　操
（日　大）　（明　大）
神永昭夫○　抽選勝　渡辺喜三郎
（明　大）　（中　大）

〔決勝戦〕
松下三郎○　払　腰　神永昭夫
（日　大）　（明　大）

全日本選手権大会出場者
曽根康治（準優勝）、山肩敏美、中野正登、岩崎勇、小林昇、石橋弥一郎、河辺一彦、渡辺政雄、石橋毅次郎

明大の技
神永昭夫の浮技

神永昭夫の立ち技は大外刈、内股払腰、大内刈、釣込足などと多彩であった。

大学のなかば頃からこれに体落しが加わり、選手生活の中、後半は体落し、大内刈が軸になっていたように思う。

彼の得意技の一つ、「浮技」は知る人ぞ知るの技である。稽古中、たたみすれすれに回転するこの技の受け身がとれず肩や首をいためた部員がいたことを思い出す。

神永の「浮技」は投げの形のそれのように必ずしも自護体の組みから入るのではなく、多くは自然体からの技で、その意味から完全な実践技である。もちろん、体を捨てる瞬間の理合は形どおりのものだった。

「浮技」はかつて永岡十段が得意とされた技である。神永は「形」の技として知られているこの技を、乱取技、試合技とするべく修練し、ものにした一人である。

総じて捨身技は微妙な流れの中で決まるものであるから、他の投げ技のように強引な仕掛けは通じない。故に、この技を完成させるためには、他の技以上に微妙な「つくり」を必要とする。彼の場合も、この「つくり」に独特の技量があったことはいうまでもないが、その部分は省き「かけ」についてを分解して見る。

先ず、動きをとらえて、体を捨てる方向の右後方に相手を引き抜くように崩す、これで相手のヒザが伸びきる。この際の両手首の使い方は、彼ならではのものがあるのだが、釣り手の左が、前えりや内そでを取っている時は稽古着を厚く握り、手首をかえして自分の上腕側部を相手の胸また脇に密着させて引きつける。

引き手の右は「形」にあるように最初から

古賀一神永戦で神永の横捨身決まる

腕を抱え込むことはせず（組手によってはこのケースもある）釣り手の動作を助けながら、体を捨てる瞬間、相手の腕を自分の右脇に引きつけて固定する。ここにも手首の使い方の非凡さがうかがわれるが、ここまでは払釣込足の「捌き」と余り変らないところに注目したい。

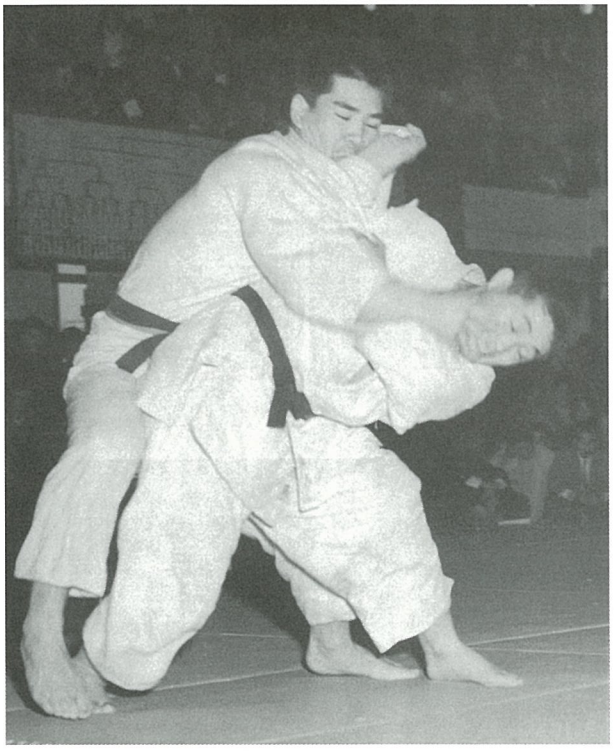
次の瞬間体を捨てる訳だが腰の働きは、体を捨てた時、尻から落ちる感じではなく、むしろ体をそらしぎみにひねって右腰から体を捨てる。捨身技の説明で腰が入る、というのは解りにくいかと思うが、正に腰が入った感じで流れのひとコマだけを見れば相撲のウッチャリが決まった瞬間に似ている。自然体からの技であるから、「つくり」から、この「かけ」の修了まで実に淀みなく流れ、横捨身技ながら、側方というより後方に相手が飛んだ。

徳山操の背負投

戦後の日本柔道史上、昭和三十年代カツギ屋（えり背負投）ナンバーワンは右の徳山操、四十年代のそれは左の須磨周司と書いても、明治の手前ミソと世間からクレームはつかないはずだ。

徳山は身長一七四cm、体重八四kg前後。稽古では、釣込足等足技さえも見せるのだが、試合での勝は右背負投によるものだけ。

最近、背負投はすっかり軽量級専用の技となってしまった感があるが、彼等の背負投と徳山のとをくらべた時、打ち込みや投げ込みを見る限りでは特に変わりはない。「受けの両足の内側にハの字が重なるように自分の足をさばき、腰は受けの股間に入る程低く飛び込む…」といった背負投が教えられていた時代に、自分が飛び込むのではなく、間合いをとって相手を引っぱり込む彼の技は「足、腰が異常に強い徳山にだけ出来る技で、高校生等はまねをしてはならない」等といわれたものであった。だが今はこれが主流である。しかし打ち込みでは本流を守っている彼等も、乱取りや、特に試合になると、結局前に述べた型になってしまう。ポイント重視の試合方法になってしまったのだからこれはこれでとりあえずはやむなしであろう。徳山は稽古はもとより試合でも膝をついて技をかけたり、又巻き込むこともめったにしなかった。したがって技が決まる時、相手の体は必ず空中で舞うことになるのだから、正に美技といえる



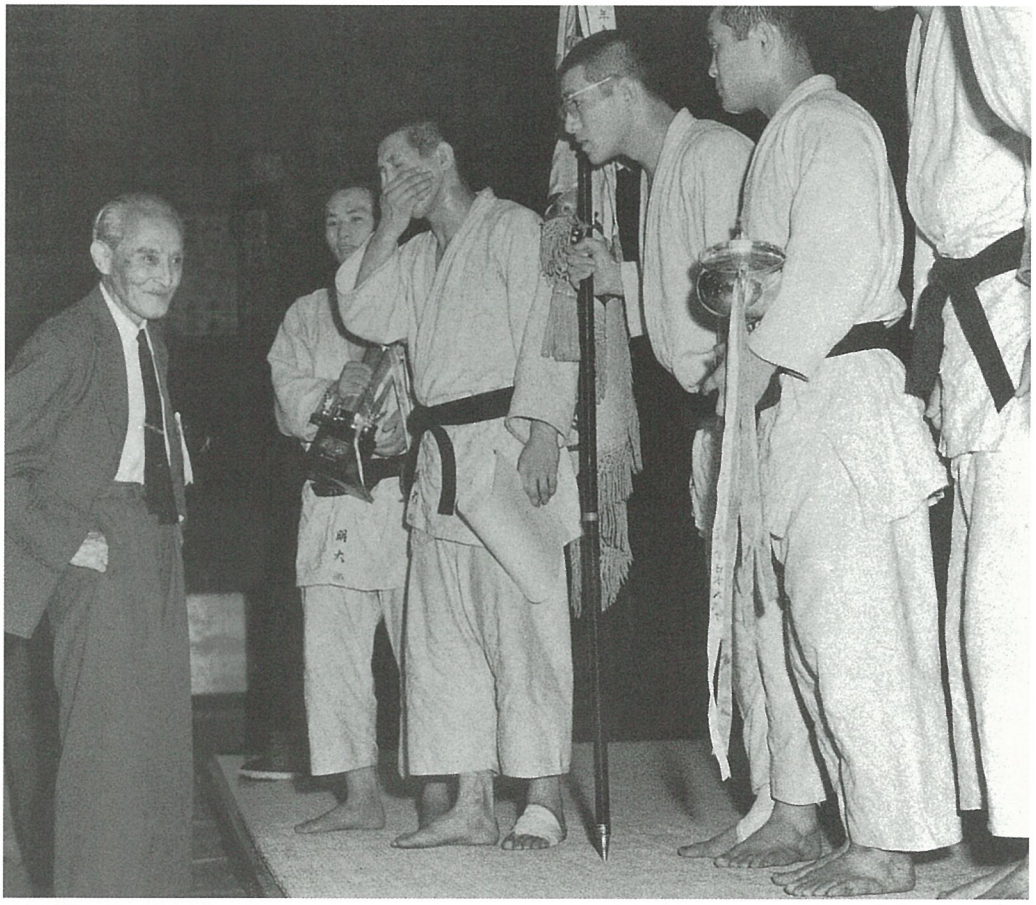
徳山操の豪快な背負投

ものであった。

例えば仕かけた時、腰が浅くて相手が引き手の方向へ回って逃げようとする時など、彼のすばらしい足はカニの横ばいのようなフットワークで追いこみ、鮮やかに飛ばしたものである。このケース、今ならたぶん、引き手の方向に体をあずけて巻き込みポイントをねらう、ということになるのだろう。

すぐれた柔道のセンスに加えてこの足と腰の強さが、彼の柔道の特徴の一であり、二はその引き手であった。彼の引き手の位置は相手の奥内袖で、袖と衿の境目あたりを小指をひっかけるようにしてとった。一見すると両衿をとっているような感じであった。

これについて「弱い相手でも引き手なしでは絶対勝てん。ナンボ引き手をきられても、袖と違ってここだと簡単にとれるケンノ。身についてしまえば引きつけも人の言う程袖とは変らん。たまに引き手が衿になって相手の腕が生きていても、ワシはつぶれんケン。手を着かれる事は無い。もっとも腕の力はつけにゃイケンガノ」。



三船師範に優勝を報告

第7回全日本学生柔道優勝大会
7月6日　東京都立体育館

明治、連覇！　五度目の優勝

天理大学柔道部は昭和二十八年に学柔連に加盟した新興の勢力であるが、指導陣を旧京都武専の出身者で固め、一昨年創部四年目にして全国制覇を果している。

本年の陣容も主将の古賀五段以下スキのない陣容であった。接戦の試合は代表戦となり、神永が古賀の大外を見事に返して一本、昨年に続いて明治の優勝となる。

〔準決勝〕

明治大学　4―1　関西大学

重松正成　優勢勝　○柴田康雄
富賀見貞典○　返　技　安田成雄
甲斐福男○　払　勝　粉川忠勝
徳山　操　引　分　笠木大海
小林健児　引　分　松江　隆
篠原一雄○　優勢勝　堀江義明
神永昭夫○　優勢勝　岩田兵衛

先鋒重松柴田の巧みな試合運びに巻きこまれ大内刈で技有りを失う。終了寸前の重松の大外刈、決まったかに見えたが場外の判定、明治出ばなを挫かれる。

富賀見大外、安田内股の応酬、安田内股から大内刈に変化すると富賀見これを読んでいたかのように見事に返す。甲斐の払腰を粉川よくかわしていたが三度目の払腰に大きく舞う。

篠原の柔軟な右釣込腰に堀江防戦一方、中盤に放った技はきれいな一本と思われたが判定は技有り、不満な観衆から野次が盛んに飛んだ。

神永試合開始まもなく膝を痛めて小休止、再開後神永の動きは少なくなり心配されたが岩田の技の戻りぎわをとらえて横捨身技（浮技）を放てば小柄な岩田は大きく飛び技有り、この判定にも野次しきり。

天理大学　4―0　日本大学

〔決勝戦〕

明治大学　1―1　天理大学
（代表戦）

重松正成　引　分　米田圭祐
富賀見貞典　引　分　東元福正
甲斐福男　引　分　井上信明
徳山　操　引　分　松本成四郎
小林健児　引　分　田村　盛
篠原一雄　優勢勝　○杉尾春彦
神永昭夫○　優勢勝　古賀正躬

先鋒重松米田の先を封じて大内刈、大外刈の連発、米田も攻勢に転じて釣込腰にかつぐが場外、熱戦のうちに時間となり引分け、身長、体重とも東元が二回り勝る、富賀見、一本背負、足技、東元内股、払腰と共に体躯を利した技の応酬で妙味津々の好試合。甲斐対井上戦は共に慎重。松本の寝技も徳山応ぜず。田村の払腰に小林舞い上がるが引き手を切って体を転じる、判定は引分け。

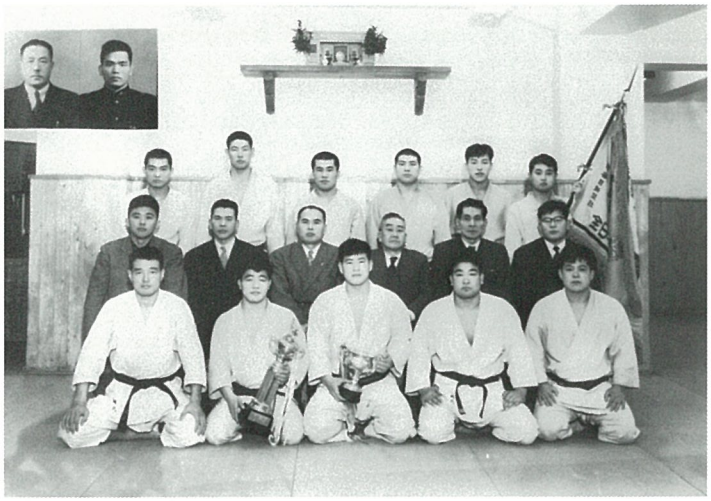
天理副将杉尾は篠原の小内刈を返して有力なポイントを取る、判定は杉尾に上がり明治大将戦を残して一点を失う。

大将戦、神永の左大外刈に古賀横転、技有りに近いポイントに場内沸く、判定は神永に上がり、同点となり会場は騒然、代表戦となる。

〔代表戦〕

神永昭夫○　大外返　古賀正躬

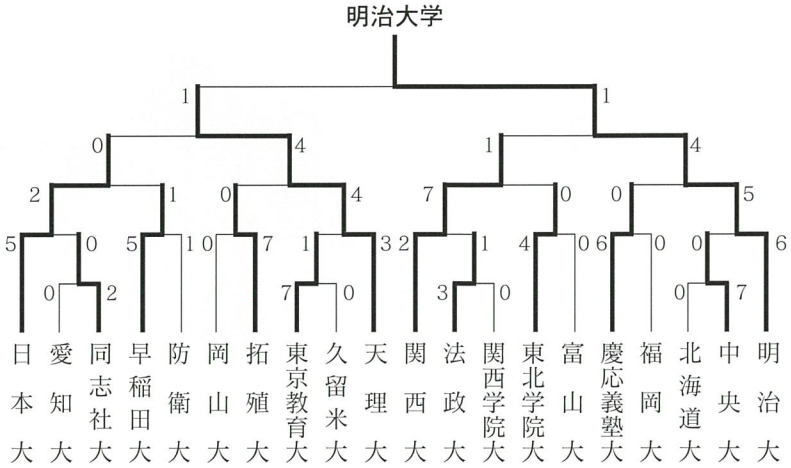
場内全く興奮のルツボ、対戦三分、古賀渾身の力で左大外刈を強襲、神永これを弓なりにそりながら返せば古賀の体が大きく飛んで一本。場内のどよめきに主審の宣告もかき消されるほど、輝かしい勝利を獲得した劇的な一瞬であった。



二連覇（2回目）の明大チーム

優秀選手

明治大学　神永昭夫
　　甲斐福男
天理大学　古賀正躬
関西大学　柴田康雄
日本大学　永田正明



第10回全日本学生柔道選手権大会

11月9日　大阪府立体育館

異例の優勝預かり

延長戦八回、神永、古賀ゆずらず。

〔準決勝〕

古賀正躬○　内股　阿部大助
（天理大）　　（慶大）

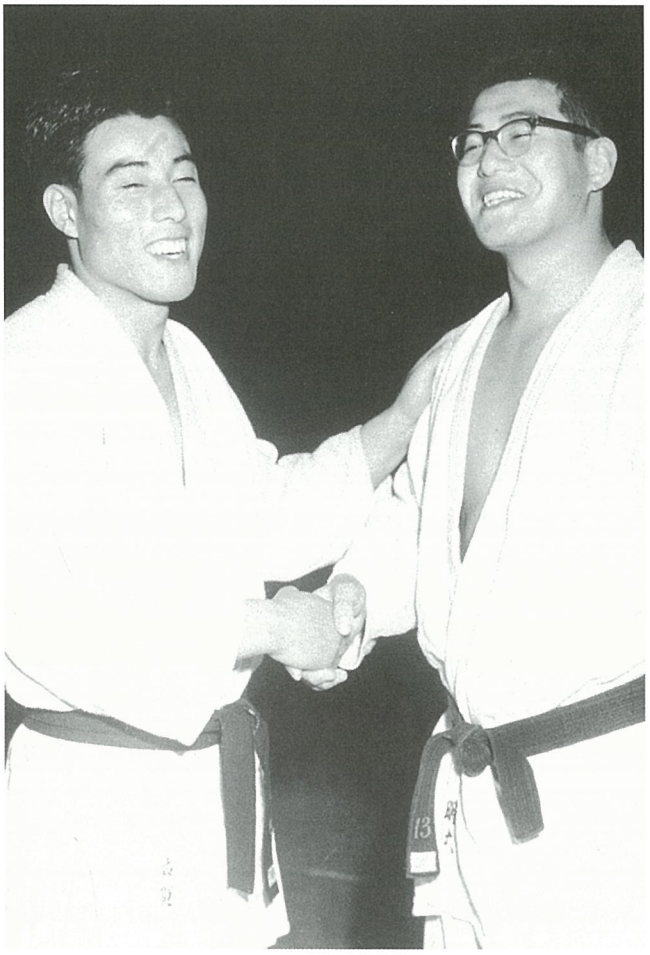
神永昭夫○　合技　笠木大海
（明大）　　（関大）

〔決勝戦〕

神永昭夫　引分　古賀正躬
（明大）　　（天理大）

満場の期待どおりの東西実力第一人者の対戦は実に延長八回、合計三十八分間の大試合となった。さすがは学生柔道界の両横綱、取手のかけ引き、理合の施技などスキのない技の流れは精神的充実と相俟って名優の動作をしのばせ、観衆に深い印象をきざみ、三十三年度を飾る学生柔道界不朽の名勝負であった。

（雑誌『柔道』より）



神永と古賀。戦い終わって握手

全日本柔道選手権大会

5月5日　東京体育館

曽根チャンピオンに

〔決勝戦〕

曽根康治　技有り　山舗公義

曽根の力量からして今回の優勝はむしろ遅きに失した感があるが、本大会では強烈な右大外刈に加えてその対角線の左背負投に研究のあとが見られ、適時にこのコンビネーションを見せた。準決勝小田五段との対戦では左背負投を連発して牽制し、突如右に変って内股から大外刈に変化した技の冴えは将に王者の柔道であった。

全日本選手権大会出場者

曽根康治（優勝）、石橋弥一郎、大野忠博、中野正登、神永昭夫

第2回世界柔道選手権大会

11月　東京体育館

曽根世界も獲る　二位神永

〔準決勝戦〕

曽根康治　合技　ハリス（アメリカ）

神永昭夫　優勢勝　山舗公義

〔決勝戦〕

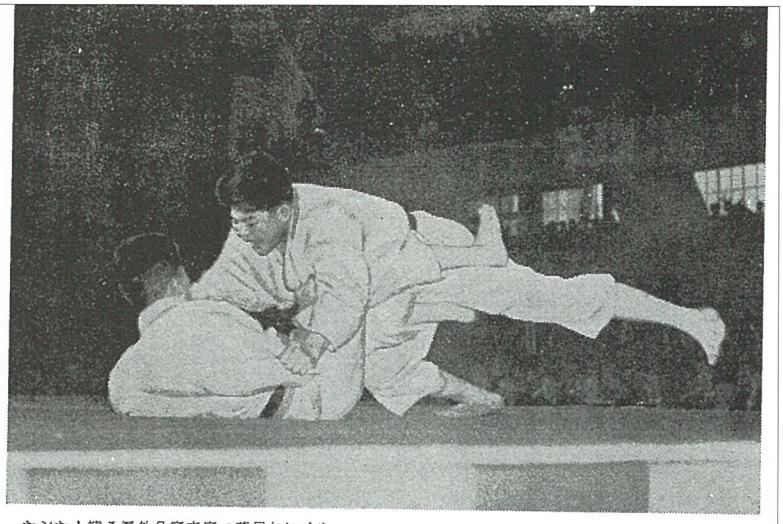
曽根康治　優勢勝　神永昭夫

予想どおり明大の先輩曽根と学生神永との決勝対決となった。曽根右、神永左ながら組手争いはなく曽根は袖口、神永は内袖の引き手。神永大内、体落、大外と真向から攻めるが、曽根崩れず、曽根、神永の大内をすかして移り腰に変じ、大きく舞い上げるが神永引き手を切ってのがれる。双方息づまる攻防をくり返し二十分終了。結局、終盤に見せた曽根の大内返しがポイントとなって曽根の優勝が決まった。

曽根五段（東京代表）初優勝

番狂わせ 醍醐、一回戦で敗退

全日本柔道連盟（理事長鏡共保、朝日新聞社後援）柔道の実力日本一をきめる昭和三十三年度全日本柔道選手権大会は五月満員の東京体育館で全部十段位から醍醐三十二選手（東海代表天野五段は棄権）が出場して熱戦を展開した結果、東京代表曽根五段が初優勝をとげた。この日優勝候補にあげられていた醍醐七段は一回戦で近畿代表吉冨五段（天理大）に敗れるという番狂わせがあるなど、試合は一回戦から若手選手の顔ぶれに塗られたが、準優勝決勝は河野雅（近畿）山舗（近畿）曽根（東京）小田（近畿）の四選手が残り、山舗は河野を五勝に、曽根は小田を大外巻込にそれぞれ鮮やかにうちとって決勝は山舗と曽根の顔合わせとなった。決勝で曽根は大内刈しの技ありをとり逃げなく試合を通じて優勢勝で選手権を獲得した。東京の代表が優勝したのは二十九年の醍醐竹末四年振りである。



曽根五段と山舗六段（近畿）の決勝戦　十三分間、山舗の内また技を通じて技ありをとる

光る若手の活躍

【評】一回戦で醍醐はあっけなく敗退した。醍醐は出足鋭くなく小内、大内刈で攻めた。ところ合いを見て大技の快技に移るかと思わせたが五分を過ぎてから古賀が足技を多く出した。醍醐も古賀は、大鎌倒雲は古賀に、森下主審が古賀の優勢を宣した。古賀を支持するものは八分に醍醐の右小内刈をかわして場外にふった為選手をあり、一方醍醐派は金縁の姿勢醍醐、選びを為のるだろう。要は醍醐がこの一敗に持前の力量が発揮出来ず古賀のペースをありきることが出来なかったのはもの足りない点で過去のブランクを克服出来なかったに敗退した。

もともと醍醐は回復うにつれて頭角の出る選手であり、一回戦に危険性があったわけで醍醐が調整に失敗したと見るべきであろう。

○…山舗と松下は山舗内また、小内の左技で攻め松下は前ひざ車で応えたに過ぎなかった。八分に山舗が中央で放った左の内またはもの足りない。ことでは今きり追う身となった松下ははじめて得意の払腰を見せ、一回目の鋭い払腰で山舗右肩を畳外に一撃する（この時山舗は巻込を狙い）一回戦からチューブを巻いて登場。顔面も出、松下のこの攻勢に場内大いにわいたが山舗が押しきった。

松下はなぜもっと積極的に仕かけないのか。若さという利点を活用するのが最善の策であったろうが、仕方のない彼のくせはぬぐいきれなかったようだ。

○…期待されたT二の二人の敗退にくらべ優勝の曽根は相手によって作戦を考える慎重な選手であった。とくに注意はヤマ場もいえる準決勝の小田との対戦、昨秋の国体で敗れた苦い経験を十分生かしたといえよう。小田は並素のように右の裏えり呼ぶとしたなかったのは偶然であり曽根警戒のあらわれであろうが、曽根は小田に左ソデ口をとられるのを警戒し十分にならせなかったのは研究の賜であろう。一方攻めては前半左の背負と大内刈を主としていた。さらに小田の右大外刈に一度崩されて、ポイントをとられてからは、顔面を紅潮させ猛然と反撃に出た調子を紅潮させ猛然と反撃に出た調子なる闘志はすく、優勝の因もとらにひそんでいるといえよう。

○…決勝を見ない勝ちぶりだった。山舗に対し小内刈、あるいは内また返しの技ありと攻防過程をとらえた姿の動きであった。

○…山舗は肩のけががひびき、前半戦顔面の小田は曽根の気力に圧倒されたがシード選手らしい活躍であった。この中で曽根に代って作戦を考える慎重な選手であった。とくに注意はヤマ場もいえる準決勝の小田との対戦、昨秋の国体で敗れた苦い経験を十分生かしたといえよう。小田は並素のように右の裏えり呼ぶとしたなかったのは偶然であり曽根警戒のあらわれであろうが、曽根は小田に左ソデ口をとられるのを警戒し十分にならせなかったのは研究の賜であろう。一方攻めては前半左の背負と大内刈を主としていた。さらに小田の右大外刈に一度崩されて、ポイントをとられてからは、顔面を紅潮させ猛然と反撃に出た調子なる闘志はすく、優勝の因もとらにひそんでいるといえよう。

○…決勝を見ない勝ちぶりだった。山舗に対し小内刈、あるいは内また返しの技ありと攻防過程をとらえた姿の動きであった。

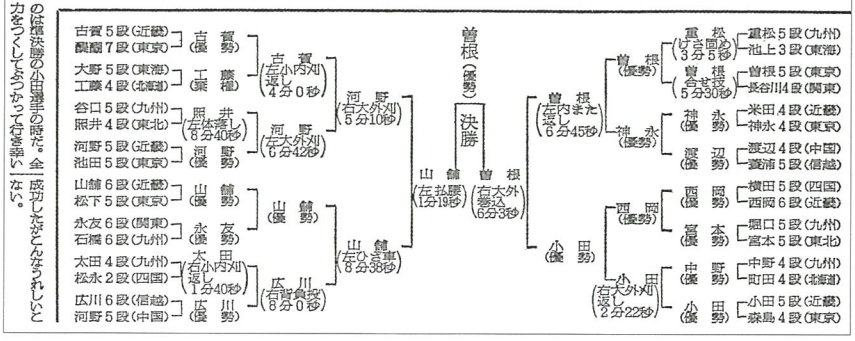
○…山舗は肩のけががひびき、前半戦顔面の小田は曽根の気力に圧倒されたがシード選手らしい活躍であった。この中で曽根に代って作戦を考える慎重な選手であった。とくに注意はヤマ場もいえる準決勝の小田との対戦、昨秋の国体で敗れた苦い経験を十分生かしたといえよう。小田は並素のように右の裏えり呼ぶとしたなかったのは偶然であり曽根警戒のあらわれであろうが、曽根は小田に左ソデ口をとられるのを警戒し十分にならせなかったのは研究の賜であろう。一方攻めては前半左の背負と大内刈を主としていた。さらに小田の右大外刈に一度崩されて、ポイントをとられてからは、顔面を紅潮させ猛然と反撃に出た調子なる闘志はすく、優勝の因もとらにひそんでいるといえよう。

曽根康治選手の経歴

昭和二十八年三月旭大卒業。富士製紙生産調動部。二十九年から全日本選手権に五回出場した。戦後学生柔道の復活と共に三度優勝した明大の黄金時代のリーダーをつとめた。毎夕母校道場で学生相手にけいこをし真面目な態度が高く賞われている。農林庁前期八段曽根幸蔵氏は叔父にあたり柔道一家として有名。二十九歳。

苦しかった準決勝

曽根選手の話　一番苦しかったのは準決勝の小田選手の時だ。全力をつくしてぶつかって行き詰いし成功したがとんなうれしいとない。

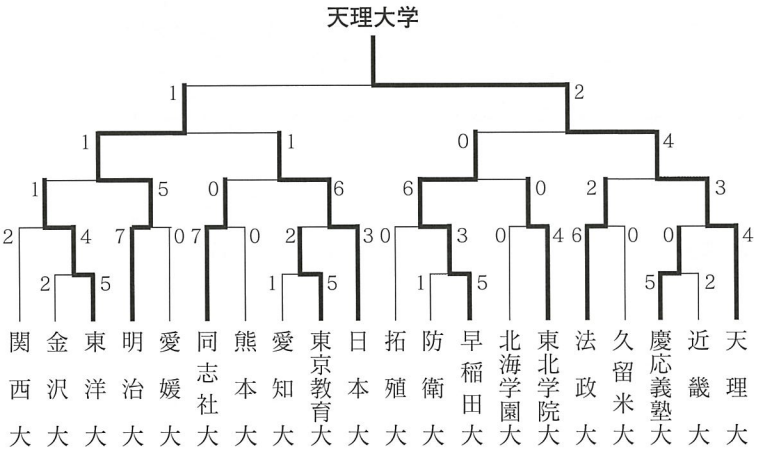


曽根康治の初優勝を伝える朝日新聞

第8回全日本学生柔道優勝大会

7月5日　東京都立体育館

惜敗　準優勝



〔準決勝〕

明治大学　1―1　日本大学

（代表戦）

佐藤　治○　大内刈　佐藤尚孝

山口友孝　合せ技　○伊藤俊一

大橋武彦　引分　古賀　武

黒住大和　引分　藤田弘明

田中章雄　引分　保坂秋徳

篠原一雄　引分　米塚義定

重松正成　引分　高橋　彰

〔代表戦一回目〕

重松正成　引分　高橋　彰

〔代表戦二回目〕

重松正成　引分　伊藤俊一

〔代表戦三回目〕

篠原一雄　引分　高橋　彰

〔代表戦四回目〕

田中章雄　引分　伊藤俊一

〔代表戦五回目〕

田中章雄　引分　米塚義定

〔代表戦六回目〕

重松正成　○大外刈　伊藤俊一

延長六回、重松必死の大外刈に伊藤大きく飛んで熱戦に幕。

天理大学　4―0　早稲田大学

〔決勝戦〕

天理大学　2―1　明治大学

藤田家将　引分　佐藤　治

熊本誠一○　大外巻込　小林健児

伊藤　剛　優勢勝　○大橋武彦

佐野　進　引分　黒住大和

毛利国昭　引分　田中章雄

松本成四郎○　大外刈　篠原一雄

井上信明　引分　重松正成

優秀選手　天理大学　松本成四郎

明治大学　重松正成

佐藤　治

日本大学　伊藤俊一

早稲田大学　奥村　剛

第11回全日本学生柔道選手権大会
11月15日　大阪府立体育館

重松に栄冠

〔準決勝〕

重松正成（明大）○　技有　猪熊　功（教大）

古賀　武（日大）○　技有　田中章雄（明大）

〔決勝戦〕

重松正成（明大）○　技有　古賀　武（日大）

古賀組むや内股の連発、重松これを受け流す。

重松の内股体落しに古賀腹ばい、やや重松のペースながら引き分け延長戦となる。

延長に入り古賀の手数が多くなるが、その間を狙った重松の大内刈が見事に決まって技有りとなり間もなく時間、重松の優勝が決まった。

全日本選手権大会出場者

徳山操、甲斐福男、徳永三幸、曽根康治、石橋弥一郎、岩崎勇、神永昭夫（二位）

明大の技
篠原一雄の足払い

篠原の技であるが、稽古では出ない技がない、といわれた程多彩な技の持ち主であった。しかし篠原といえば足払い（出足払い、送り足払い、払い釣込足）であり、これと右釣込腰と独特の切れ味を見せた。組み方から入ると、当時の業師といわれた人達が皆そうであったように、彼も先ず相手に組ませ、自分の組み手は相手次第、つまりどこをとっても自分の攻めが出来、同じように守れるという柔道で、近年見られる攻めは攻めの型で、守りは守りの型で―、というスタイルとは基本的に異なる。特に足払いの時は持ち手にこだわらず彼我の体勢によって片手をはなしたままで技をきめていた。

「足払いは足で払うのでなく腰で払うのだ」とよく言われる。この場合の腰とは技の力点（体の中心）の事であり、足払いに限らず技の巧、否はこの力点の確かさにかかっている。ころがるボールのようにどんな動きにあっても、中心が安定している彼の体さばきから放つ左右の足払いは、調子技の一般に見られる助走というか、導入部のリズムを必ずしも要しない。彼の場合、リズム即、運動神経ということなのだろう。どこから飛び出してくるか解らないこの足払いにかかると、上手でない者は、動けば動くで投げられ、止まれば止まるで又飛ばされる、という散々な目にあってしまう。

「篠原さんの足はよほど強いんですネ」

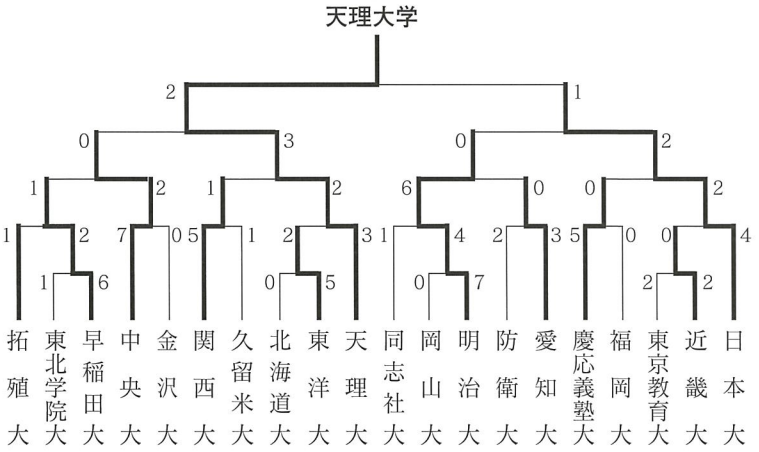
これは、ほとんど軽い持ち手でポンポン技をきめている稽古を見ていた人の言葉である。

全米大会で活躍する篠原一雄

第9回全日本学生柔道優勝大会

6月18日　東京都立体育館

準決勝で敗退



〔準決勝〕

天理大学　3―0　中央大学

日本大学　2―0　明治大学

附田　満　引　分　高田誠之助

古賀　武○　大内刈　石原賢信

佐藤尚孝　引　分　佐藤栄吾

三浦　栄　引　分　重松正成

松林良雄　引　分　宮崎敬一

尾崎保夫○　技　有　佐藤　治

伊藤俊一　引　分　田中章雄

〔決勝戦〕

天理大学　2―1　日本大学

第12回全日本学生柔道選手権大会

11月6日　大阪府立体育館

重松連続優勝

〔準決勝〕

重松正成○（明大）　優勢勝　山岸　均（東洋大）

両者自重して技が出ない。中盤重松の大内刈技有りかと思われたが判定はなし。しかしこの技の有効性が重松の勝ちにつながった。

田中章雄○（明大）　技　有　古賀　武（日大）

三分すぎ、田中は古賀の退きぎわを小外刈に合わせて技有り。その後、あせって出る古賀に引手をあたえず時間となる。

〔決勝戦〕

重松正成○（明大）　小外刈　田中章雄（明大）

同門対決となった決勝戦、重松、田中の大外を返して優勢に試合を進める。時間切れ寸前首をころされていた田中が後退するところを重松きれいに小外刈できめて学生柔道初の二年連続優勝をとげた。

全日本柔道選手権大会
4月29日　東京体育館

神永、優勝、重松三位

昨年に続いて神永、猪熊の決戦となった。昨年は苦杯を喫している神永雪辱を期して気迫満々に攻めるも猪熊の守りは堅く延長戦となる。開始まもなく神永の小内刈に猪熊倒れて技有りに近いポイント、終盤、神永の釣込足に猪熊再び横倒れとなり神永の優勢を決定づけた。今春卒業の重松も健闘し三位に入った。

〔決勝戦〕

神永昭夫（富士製鉄）○　優勢勝　猪熊　功（順大教員）

全日本選手権大会出場者

神永昭夫（優勝）、比嘉良幸、曽根康治、黒住大和、岩崎勇、徳山操、関勝治（高校生）、重松正成（三位）

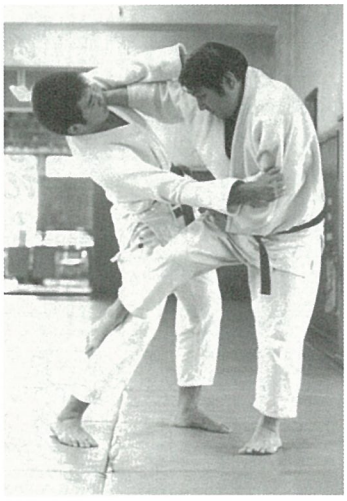
明大の技
田中章雄の足車

足車は難しい技であることから研究技として知られている。また乱取りや試合では、大外刈や払腰の変化から足車ふうに決まることがよくあるので、大まかにこの技をとらえている人は多い。しかしその足車の理合いを正確に説明出来る人は意外と少なく、まして、これを体得し、自分の技としている人は稀少である。

足車は、大車や体落と同様、いわゆる調子技である。大外刈との違いはこの点にあるのだが、この技をこなす人の多くは、大外刈の稽古中に、そのタイミングをつかんでいる。

田中も講道館の少年部時代から右大外刈を得意としていたが、時々「返し」にあうところから、「返し」への対応を含めて一七四cmの身長にあった大外刈を研究している過程で足車のコツを体得した。以後、これまで苦手とした長身の相手が、むしろやりやすくなったという。彼の技は、崩しの方向を教本にあるように真後ではなく、やや側方にとるところに特徴がある。簡単に説明すると、（右技）体さばきの中で受けの右足が一歩さがるようにつくる、取りはこれにあわせて左足を進めながら相手の重心が左足から右足へ移動する瞬間両手をきかせ、つり手をボクシングのフックパンチのようにアゴ下を押し、引き手は自分の左腰の方向へ手首をきかせて引きつける。この崩す方向が違う両手の働きで受けは右側方に大きく崩れる、取りの足さばきは、受けの右足が退るのにあわせて左足を半歩前進させ前述の両手の作用で相手の重心が右に移る瞬間、右足をふり上げ右膝ウラに足首をかける、次いで両手を一層きかせてねじ伏せるように側後方に飛ばす。

本人は自分の足車の利点を、①返されにくいところから実戦向きである、②比較的、体のかたい外人向きである、といっている。



田中章雄の足車

第10回全日本学生柔道優勝大会

6月18日　東京体育館

明治六回目の優勝、天理の三連覇を阻む

〔準決勝〕

明治大学　1―0　日本大学

高田誠之助　引分　平石正則
関　勝治　引分　附田　満
神屋興介○　返し技　白崎淳悦
神永正夫　引分　尾崎保夫
朝田紀明　引分　田中武人
田中章雄　引分　三浦　栄
佐藤　治　引分　佐藤尚孝

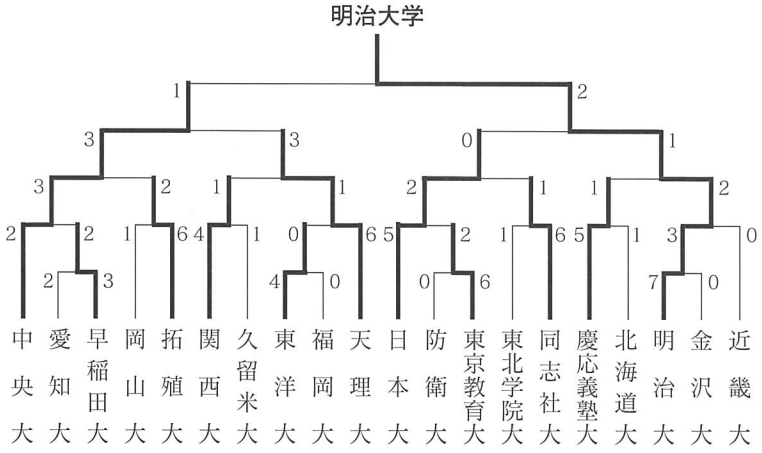
神屋、白崎の大外刈攻撃パターンを読んだかのように単調な白崎の三回目の大外を大きく返して一本。結局これが貴重な勝利得点となった。

中央大学　3―3　天理大学

〔決勝戦〕

明治大学　2―1　中央大学

神永正夫　引分　吉村　巌
関　勝治○　優勢勝　市川和義
神屋興介○　大腰　下坂卓夫
田中章雄　優勢勝　○山本彰一
佐藤　治　引分　大内賢一
朝田紀明　引分　芳垣修二
高田誠之助　引分　辻井一男



関、攻めたてて背負投技有り、神屋、下坂の内股を移り腰ぎみに跳ね上げ左腰にのせて一転させる。田中、山本の大内刈に横転ポイントを失う。大将高田巨漢辻井の攻勢を巧みにさばいて一点を守り明治六回目の優勝。

本大会は初めてテレビ放映（NHK、NTV）された。

優秀選手　明治大学　神屋興介
佐藤　治
中央大学　辻井一男
天理大学　熊本誠一
関西大学　古瀬良昭

天理大の三連覇を阻んだ明大チーム

第13回全日本学生柔道選手権大会
10月5日　大阪府立体育館

〔準決勝〕
田中章雄○　内股　佐藤　治
（明大）　（明大）
古賀　武○　技有　高田誠之助
（日大）　（日大）

〔決勝戦〕
古賀　武○　技有　田中章雄
（日大）　（明大）

全日本柔道選手権大会
4月29日　東京体育館

神永連続優勝

〔決勝戦〕
神永昭夫○　合せ技　猪熊　功
（富士製鉄）　（順大教員）

前半両者共に慎重波乱なし、試合中ばから神永の大内刈が目立ちはじめたが、猪熊も背負を狙って前に出る。押して出る猪熊、右へ右へと回る神永、正に虚々実々の動きである。共にポイントなく時間となる。

五分間の延長戦に入り俄然激しい組手争いとなる。二分すぎ猪熊神永の内股の後に抱きついて返し貴重なポイントをとる。やがて立上り猪熊気をゆるめたか神永に奥襟を許したと思った瞬間、神永が疾風のような体落に入って猪熊が一転した。「技有り」の声がかかった時には既に神永は崩袈裟固めに入り左腕も殺された猪熊はなんとも施すすべがなかった。ここに神永は完勝して輝く二連覇の偉業を成しとげたのであった。（雑誌『柔道』から）

全日本選手権大会出場者
神永昭夫（優勝）、重松正成、甲斐福男、田中章雄、関勝治

全日本選手権大会2回目の優勝を果たした神永昭夫

第11回全日本学生柔道優勝大会

6月16・17日　東京体育館

明治連覇、七回目の優勝

今大会は出場校が三十二校に増え、試合も二日間に分けて行われた。最終日の優秀四校の決勝リーグは明大、日大、中大が激しくせりあって、各二勝一敗の同率となったが、明大総得点八点で日大より一点多く、通算七度目の優勝を飾った。

〔決勝リーグ戦〕

明治大学　3―1　天理大学

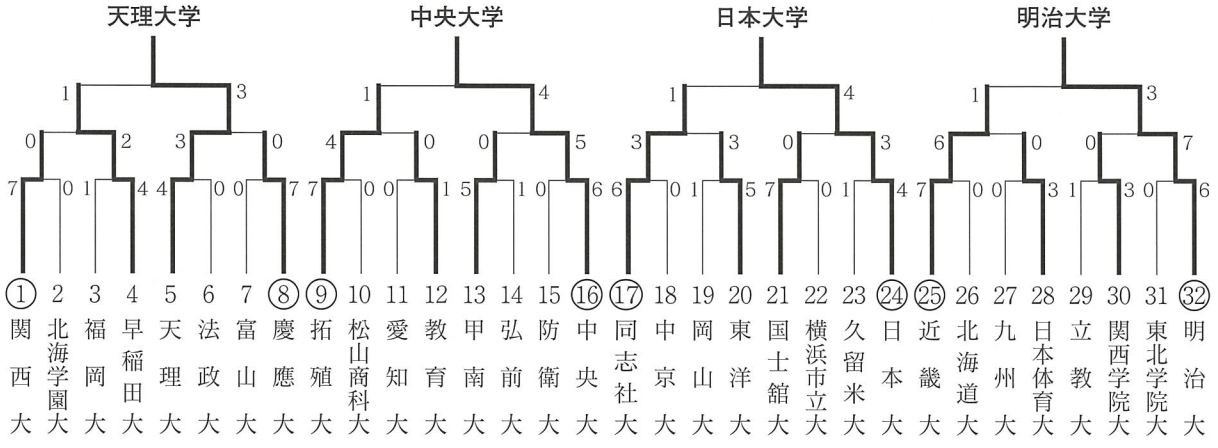
関　勝治○　崩袈裟固　市岡英人
村井正芳　引　分　安井　清
山本忠史　引　分　金　義泰
神屋興介　返し技　○與田光男
坂口征二○　優勢勝　遠劦信一
田村興靖　引　分　前島延行
朝田紀明○　足　車　磯崎　清

先鋒関、急襲速攻、大内刈からすかさず寝技にもちこみ一本、村井、安井ともに右大外刈の応酬で気迫のこもった勝負になったが引分、金、山本をかつごうとするが不発に終る。神屋大内刈を返されてタイにされる。遠劦大外、内股と猛然と攻めるが一呼吸した坂口の大外刈は技有となり2対1、前島キレのいい小内刈を見せるが、田村左の内股を見せながら分ける。朝田磯崎の腰技を切り、体が離れたところにタイミングよく右の足車に入りきれいな一本。

日本大学　4―0　中央大学
中央大学　2―1　明治大学

岡野　功○　優勢勝　関　勝治
木村秀二　引　分　村井正芳
吉村　巌　引　分　神屋興介
中村浩之　優勢勝　○田村興靖
下坂卓夫　引　分　山本忠史
芳垣修二　引　分　坂口征二
山本彰一○　優勢勝　朝田紀明

岡野の背負投を関半身となってのがれるがポイント、一点を先行される。村井寝技に追い込んだがあと一歩、神屋不調か動きがいま一つで引分、田村の左大内刈タイミングよく



きまったが体をひねられて技有に終る。坂口小柄な芳垣に両袖をしぼられて攻め切れず、朝田大内刈を返されて技有りをうばわれたところで時間となった。

日本大学　1—1（内容勝）　天理大学
中央大学　2—1　天理大学
明治大学　4—2　日本大学

村井正芳　優勢勝　○平石正則
関　勝治　優勢勝　○高松　勉
山本忠史○　大外刈　土山　宝
神屋興介○　内　股　下内　翼
坂口征二○　大外刈　鈴木伸彦
朝田紀明　引　分　白崎淳悦
田村興靖○　技　有　大西英夫

村井の絞めが入ったかに見えたが場外にのがれられる。平石の大外巻きがポイントとなる。関攻めまくるが終了寸前に小外掛けでポイントを失う。明治0—2とされ日大の気勢が上がるが、山本必死の大外刈が見事にきまってまず一点を報いる。続く神屋の内股もきれいにきまって同点とする。長身坂口奥襟を引きつけて右大外刈に入れば鈴木たまらず宙に舞った。朝田対白崎ともによく攻めあうが引分、田村、気迫、技ともに大西を上回っている感じよく攻めて内股から大内に刈って技有、大きな勝ち点を上げる。

優勝　明治大学　二位　日本大学
三位　中央大学　四位　天理大学

連覇（3回目）した明大チーム

第14回全日本学生柔道選手権大会
11月4日　大阪府立体育館

朝田に栄冠

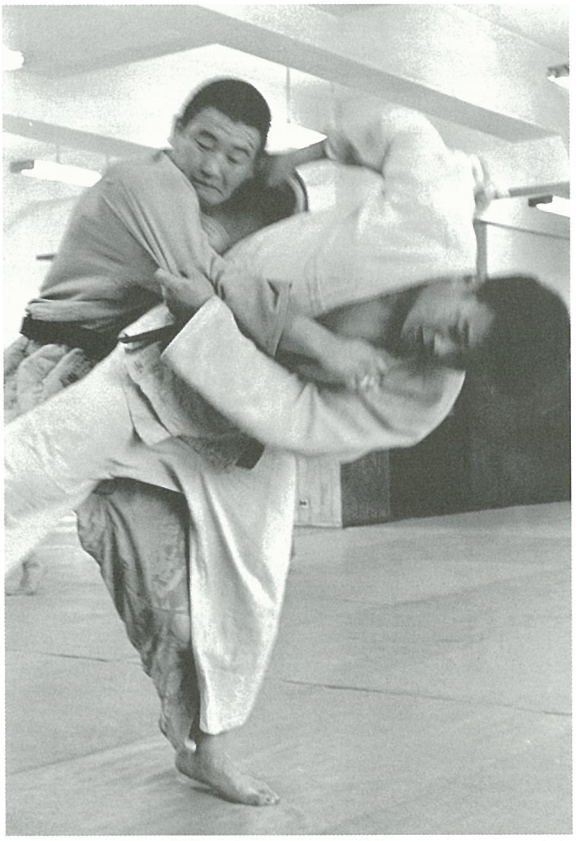
〔準決勝〕

朝田紀明○　技　有　松坂　猛
（明　大）　（近　大）

朝田は内股、大内と猛攻一挙に勝負を決せんとの意気込み、中盤気負って出る朝田の足払を松坂返してポイントをとる。これを機に松坂も攻勢に転じ松坂の優勢勝ちで終るかと思われたが朝田あわてず粘りのある右大外刈で技有をとる。朝田決勝進出が決まる。

坂口征二○　優勢勝　岡野　功
（明　大）　（中　大）

ファイトの鬼と化した岡野先制攻撃に出れば坂口は懐をしめ背負を警戒する慎重な構え。中盤坂口の柔軟な大外はポイント、岡野ばん回をはかり小内、背負、巴投と攻めるがついに時間、坂口の判定勝ちとなる。坂口長いリーチを生かし最後まで岡野を懐深く入れさせなかったのが勝因。


曽根監督と稽古に励む朝田紀明

〔決勝戦〕

朝田紀明〔明大〕○　技有　坂口征二〔明大〕

明治同士の決戦となった。

中盤、大内刈をかけた坂口が体勢を崩したところを朝田すかさず横捨身に変化すれば技有りとなる。坂口そのまま寝技に入り坂口チャンスの抑込みの型になるが朝田の足を抜ききれず時間となり朝田優勝が決まった。

第4回アジア競技大会
9月　インドネシア

優勝　高田誠之助〔丸善〕

全日本選手権大会出場者

甲斐福男、高田誠之助、重松正成、佐藤治、田中章雄、神屋興介、坂口征二、関勝治、山本忠夫

ジャカルタで。左から2人目が高田誠之助

明大の技
村井正芳の大外刈

大外刈の要点はいくつかあり、様々研究されているが、村井（右技）は右手、すなわち釣り手の使い方をポイントに稽古をしていた。踏み込む時の体重の移動をとらえた釣り手の使い方、これを偶力というのだが、実によどみがなく強力だった。偶力とは水道のじゃ口やバルブを開く時に使う力と思って頂けるといいが、投技の釣り手の動作は基本的にはみなこれである。とくに大外刈ではこの点の上手、下手が結果に大きく作用する。

写真の技は踏み込みも十分で型のように真後に持っていっているが、村井は乱取や試合で踏み込みが不十分な時でもこの右手の使い方と強力な上半身の密着で相手のバランスを右後に崩していたから、第二弾目のヒネリで鮮やかに飛ばしていた。村井の大外刈の特徴はこのヒネリにあるという人も多い。そのあたりは、曽根康治の技に通じるものがある。村井はパワフルに攻める方だったので彼の大外刈を強引と見るムキもあるようだが理にかなった稽古の賜物なのである。

いま大外刈の練習を見ていると（ハイレベルにある人たちの場合でなく）、引きつけ、踏み込み、刈り、とよく研究しながらやっているが釣り手をそれらの補助動作と見ているのか、あまりこまかくいわない、大方は相手と胸が密着していればよしというところ、たとえ釣り手が首をまこうと、背中をとろうと、（正さねばならないことだが）使い方の理くつは教えなければならない。もちろん、引きも、刈りも、釣りも、それぞれがバランスよく連動するから技になるのだが今も昔も大外刈のうまいといわれる人はみなこの釣り手の使い方がうまくまた特徴も持っていたように思う。

昭和37年の東京学生優勝大会　大外刈で下内（日大）を破った村井正芳

第12回全日本学生柔道優勝大会
6月15・16日　東京体育館

明治二度目の三連覇

〔決勝リーグ戦〕

明治大学　4―1　日本大学
村井正芳○　横四方固　江口幹彦
関　勝治　引　分　鳥越　定
富田弘美　送り襟絞　○北村明雄
石原賢信○　合せ技　増田節夫
上野武則○　優勢勝　平石正則
山本忠史○　払　腰　鈴木伸彦
坂口征二　引　分　白崎淳悦

明治大学　4―0　早稲田大学
村井正芳○　大外刈　長井孝光
富田弘美　引　分　山崎泰一
関　勝治○　大外車　淀谷隆弘
坂口征二○　大外刈　片岡　安
上野武則　引　分　荻野晄一
山本忠史　引　分　伊藤博元
石原賢信○　大外刈　平井信之

明治大学　4―0　天理大学
上野武則○　優勢勝　平尾勝司
関　勝治　引　分　遠劔信一
山本忠史　引　分　與田光男
村井正芳　引　分　金　義泰
富田弘美○　出足払　安井　清
坂口征二○　巴上西方固　山中圏一
石原賢信○　裸　絞　伊藤武範

天理大学　2―1　日本大学
日本大学　3―1　早稲田大学
天理大学　1―1　早稲田大学
（内容勝）

優秀選手　明治大学　坂口征二
村井正芳
日本大学　白崎淳悦
天理大学　遠劔信一
早稲田大学　片岡　安

第15回全日本学生柔道選手権大会
11月9・10日　大阪府立体育館

重量級　優勝　石原賢信（明大）

東京国際スポーツ大会（柔道競技）
10月　日大講堂

無差別級　優勝　村井正芳（明大）
重量級　優勝　重松正成（旭化成）

全日本選手権大会出場者
神永昭夫、重松正成、宮崎敬一、田村興靖、甲斐福男、佐藤治、朝田紀明、田中章雄、山口友孝、神屋興介、関勝治、坂口征二、鳥海又五郎、村井正芳、山本忠夫

三連覇（2度目）の明大チーム

明大の技
関勝治の大内刈

稽古の虫といわれた関勝治は寝技の練習にはとくに時間をかけた。姿師範の〝寝技の足の使い方〟継承者でもある。

したがって関といえば寝技のイメージが強いのだが、大内刈がらみのねばっこい立技にも定評があった。裂帛の気合もろとも相手のふところにくらいついていった左大内刈の迫力に武道館がわいたものだった。

この大内刈から釣込腰、体落などの連絡があるのだが、大内刈からの崩れをとらえる寝技の型も持っていた。

「立ち技は足技から―」が彼の持論であるが就中、大内刈のマスターこそ立ち技上達の基本である、として学生たちに教えている。

そういえば、チャンピオンレベルはみなこの技を得意とし独自の型を持っていた。

関は大内刈の要点を四つ上げている。

（一）相手が自然体、自護体、またどんな変形であっても、真正面から入る。

（二）重心は絶対に相手より低く。この際膝のバネがカギとなる。

（三）胸と胸を合わせる。

（四）刈りとった足を逃さず、しつこく追込んでいける体さばきを身につける。

この四点は、大内刈体得のオリジナルでもある訳だが、関はこの基本をおぼえたものがそれを実践的な得意技と出来るかどうかは特に（一）の修練にかかっているという。

ここで（一）の要点をふまえた関流の右変形に対する左大内刈を簡単に紹介する。

釣り手は下から、どうしても下からとれない時は上からとってヒジを相手の腕下にネジ込む。引き手は袖、または内袖。

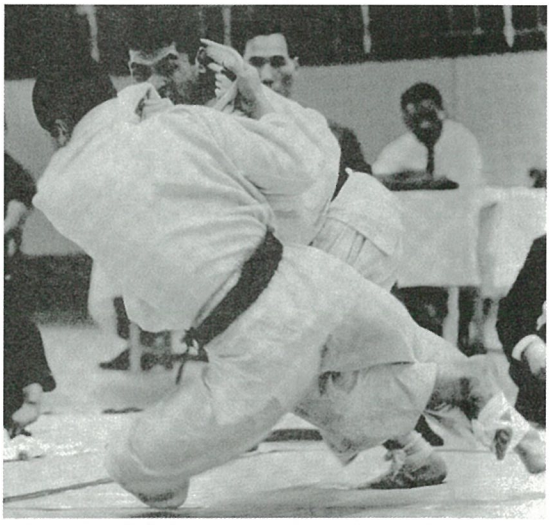
釣り手をきかせて相手を釣り込みぎみに誘う。（投げの型にある内股のつくりを参考）

流れをゆるめず、自分の右足を大外刈の掛けのように相手の左足内側に踏み込む。（この際、つま先は外向きにならないように注意）

大内刈の基本型は軽く踏み込んだ足のかかとの後方に軸足を引きつけるのだが、ここでは変則的に軸足から踏み込むことになる。

この瞬間相手の正面に対している事になり、胸も合っている。次に左足をかかとから入れて重心の乗っている相手の右足を刈る。

基本的な掛けではどうしても右変形を正面から攻めにくい。したがってこのような変則的な掛けが有効になるのだが変則とはいいながら基本をふまえた高度な技術である。



関勝治の技が決まる

東京国際スポーツ大会無差別級決勝、村井正芳の縦四方固め

第13回全日本学生柔道優勝大会

6月27・28日　日本武道館

明大史上初の四連覇

本大会史上初の四連覇を狙う明治は、関主将以下日頃の猛練習の結果を遺憾なく発揮し、輝く四連覇を達成した。

〔準決勝〕

早稲田大学　1―1　日本大学
明治大学　3―1　東洋大学

鳥海又五郎　引　分　小丹義秋
上野武則　優勢勝　○三上和広
村井正芳○　内　股　海津　勉
関　勝治　引　分　佐藤輝昭
積田　勝○　優勢勝　高橋浩一
山本忠史　引　分　西潟誠一
坂口征二○　払釣込足　中田　浩

村井は海津が動いて撹乱しようとするのをみてとりじっくりと組み、引きつけて豪快な内股で一本。高橋は挽回を期して必死の形相で攻めるが、積田も村井同様落ちついて難なく内股で決める。中田しきりにねばるが力の差は歴然、坂口の釣込足に宙を舞った。

〔決勝戦〕

明治大学　3―1　早稲田大学

鳥海又五郎　引　分　淀谷隆弘
積田　勝　引　分　近谷忠行
村井正芳○　大内返し　山下雅之
関　勝治　小外掛　○長井孝光
上野武則　引　分　酒井国利
山本忠夫　大内刈　藤内国麿
坂口征二○　払　腰　山崎泰一

先鋒、次鋒引き分けのあと、村井、山下の大内刈をみごとに返して一本。関、優勢に進めながら長井の小外掛を内股に切り返そうとして体をあずけられ同点となる。

今大会やや不調で引分け試合の多かった副将山本決勝にきて俄然気合が入り前に出る。中盤、山本強引に引きつけて大内刈を放てば、ややスタミナ切れの藤内たまらず倒れる。

大将坂口、山本の一本勝ちに気をよくしたのか悠々と試合を進め再三、再四場外に山崎をとばし、最後は左払腰で鮮やかに決める。明治四連覇達成。

優秀選手

明治大学　村井正芳
　　坂口征二
早稲田大学　長井孝光
日本大学　北村明雄
東洋大学　三上和宏

初の四連覇を達成した明大チーム